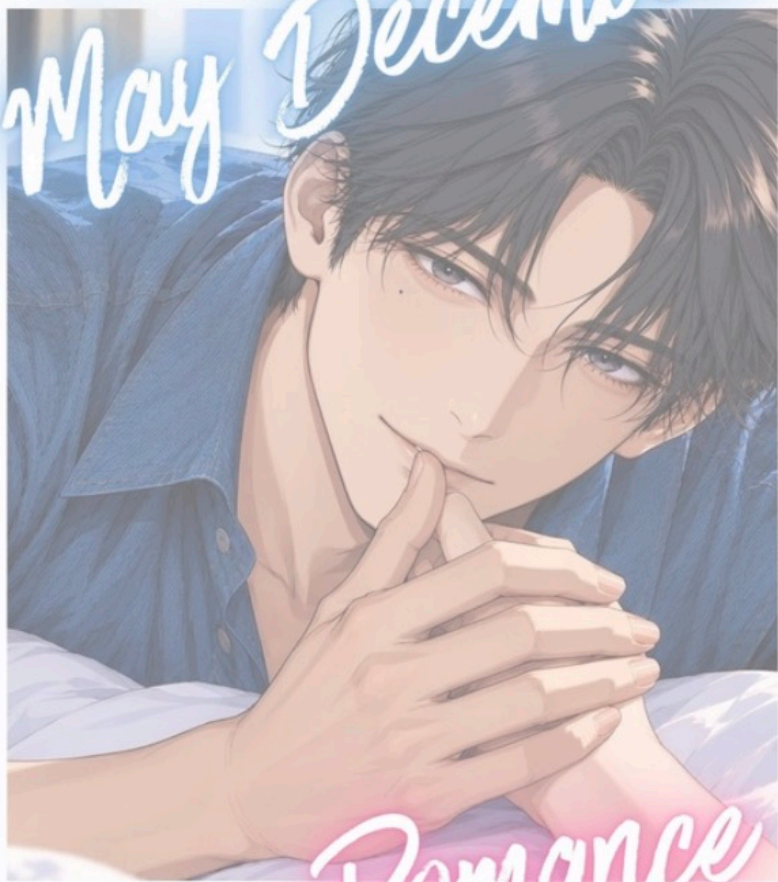


May December



Romance

1. たとえ春がきても、花は咲かないがそれでいい

「——たまには、ご一緒させていただいてもよろしいですか」
いつも通りの、低音で耳に心地よい、甘い声だった。

そしてそれは、私だけにかけられた言葉ではない。

ここにいる、ランチタイム中の事務員全てにかけられたもの。

「あらあ所長！ どうぞどうぞ！ 嬉しいわあ！」

最年長のベテラン事務員、ヒロセさんが明るい声で彼を迎えた。

つられるように口角を上げて頷いてみせると一瞬だけ目が合い、微笑まれる。内心慌て、そして平静を装いさりげなく目を逸らした。

事務所近くの、最安値で外食できる大助かりなおしゃれカフェにて。

我らが所長の志岐さんは、にこやかに「どうも」と言いながら真向かに腰掛ける。

——…はあ。今始まった話じゃないけど……。

弧を描く唇は、形が整っていてちょうどよく薄い。

もぐもぐと食べ始めた頬は皮膚が薄くて、咀嚼のたびにしっかりと膨らんでいる。

鼻梁はまるで彫刻みたいで、優しげなのに芯の強い眼差し。

週に三回、忙しい合間にジムへ通う体はほどよく厚く、彼の一般的同年代の人たちとは別格な、初夏の木々のような力強さを感じる。

それなのに、本人そのものは秋口の晴れ間のような穏やかさが滲んでいて……。

あー志岐さん。ほんつつとに好みです、今日もトライケメン……。

どうなってるんだ……？ 本当にこの人は四児の父なのか……!?

……と、何万回目かの驚きにいつまでも新鮮な感覚で、しかしそんな表情はおくびにも出さず、ぼんやりとサラダをつついた。

ちなみにここに就職して五年だが、毎日そう思っている。

「実はヒロセさんに、息子のことでちよつとご相談があるのですが」

「あら、はいはい？ なにかしら」

相談、なんて言ってもそんなに深刻な温度感はない。

同席している私を含めた従業員がそばにいて聞き耳を立てても問題ないような話題なのは、雰囲気伝わってくる。

「長男が来年の春、就職に向けて、家を出たいと言ってます」

「ああ、巡世^{じゅんせい}くん、もうそんなに！ みんなうんと大変だったものねえ。偉かったわよ、頑張り屋さんで。大きくなったわねえ」

志岐さんは七年前に奥さんがご病気で亡くなられたあと、ずっと男手ひとつで息子さん四人を育ててきた。

長男の巡世くんがある程度成長してからは、志岐さんとの二人三脚で、育児や生活と向き合ってきたのだ。

「ええ。それで……。ヒロセさんのご子息に、部屋を探してもらいたいと話していたんです」

「あらまあ！ もちろんもちろん！ ありがとう、息子も喜ぶわあ」

ヒロセさんの息子さんは、不動産業を営んでいる。

なるほど……、そうなんだ。巡世くん、もう大学卒業かあ。

私がここに就職した当時、確か来年受験とか言ってたんだよな。

そう考えたらまあずいぶん長いこと私も、ここでお世話になってるんだなあ。

「……まあ！ 巡くんも、会計士さんに！」

「最近になって言い出しましてね。以前は違う職種を目指してた気もするんですが」

「親子二代で！ 素敵じゃない！ 巡くんが所長さんになるまで生きてられるかしら！ もー私なんか、棺桶に片足突っ込んでるようなもんだから！ あっはっは!!」

「まあ息子が継ぐのか独立するのはさておき、ヒロセさんはずっと元気でいて下さいね。どうかお願いですから」

「あらあ！ 所長からそう言われたら、延びるわあ、寿命!!」

他の事務さんも、志岐さんのイケメンご子息の話に入って花を咲かせている中、空気になって微笑みながら頷いていた私は――……。

……ちよつと愕然としていた。

……私、志岐さんに激重片想いをはじめて……正味……何年になるんだろう。

――そうなんです。

この私の、絶賛片想い中のお相手、志岐^{しき}世一^{せいいちろう}さんは――……。

もう出会ったときには、よそ様の旦那さんでした。――完。

……しゃあない。けど、いいんすよ。

志岐さんの人生の、末端の末端、ほんの少しでも役に立てたら、自分の生きる意味もあるってなもんで……。

私は、それでいいんです。……はー、うざ。

なんだこの悲劇のヒロインぶったこの……。この……。

「——ああ、もうこんな時間だ。さて、私は先に。ええと、十四時半からE商会ですよ。車の手配は？ 済んでいますか？」

……思いを馳せていた時間が長かったらしい。

すっかり立ち上がって、こちらに顔を傾けた志岐さんとバッチリ目が合った。

「……あ、ええ！ 十三時四十五分に事務所に、と連絡しておきました」

つられて慌てて席から立ち上がると、椅子が焦ったようにカタンと音を立てる。

彼が腕時計を確認する間、それを涼しい顔で直した。

「あと十分くらいか。ありがとう」

彼は振り向き、「皆さん、今日のお昼は私が持ちます。ヒロセさん、ありがとうございました」そう言ってフツ、と微笑む。

一同は顔を赤くして「ご馳走さまでーす♡」と元気に挨拶をした。

それで秘書の私も、先輩方に「先に戻ります！」とぺこりと頭を下げ
て、彼の後ろを控えめにゆっくり追いかける。

「ご馳走さまです志岐さん。いつもありがとうございます」

クレジット端末にスマホをかざしている彼の背中から、頭がおかし
くなるほどのいい匂いが鼻先を掠めた。

「どういたしまして。皆さんには、お世話になっていきますから」

レジに立つ女の子の目が、ハートになっていた。

うん、わかる、わかるよお。

許されることならば全力で嗅ぎたくなる、体温が上がるとほのかに漂
うスパイシムスクと、スーツの清潔な香り。

加齢臭とかを本人は気にされているお年頃なのに、不思議なくらい本
当にそういったことに無縁な人だ。

「ああそうだ。帰社までにX社の書類作成、よろしくお願いします」

「はい、午後イチで取り掛かります。本日はそのあと、そのままジムに向かわれますよね？ 帰社までには、間に合わせます」

「ああ、助かります。……よっ、と」

カランカラン、とドアベルの音色が耳を掠めた瞬間。

「……それで、今夜は？ 時間があるかな」

彼の業務的な敬語が突然抜け、声量が落ちる。

カフェのドアを開けてくれている自然な仕草の、いつものやわらかな眼差し。けれど……。

さっきの談笑の中にはなかった微かな甘さが、ここだけにあった。

「あっ、こん……、今夜」

「そう。今夜。……いい？」

いつも穏やかな彼の、見下ろされているのに乞うような眼差しに、勝てたことは……いまだにない。

「……はい！ 嬉しい。ご連絡、お待ちしておりますね」

小さくそう言って長年の演技力をかけて軽やかに笑いかけると、彼も安堵したように微笑んだ。

歩きながら、迎えの車が事務所の駐車場へ入っていくのが見える。

今日は彼は、税理士のほうの仕事。

個人で請け負う仕事は、圧倒的に税理士の仕事のほうが多い。

「……楽しみにしてる。では、行ってきます」

ぼん、と肩を撫でられて、彼は私を通り越して車へ向かった。

さりげなく触れられた、その手の温かさに。

たったそれだけのことなのに、もう体が熱い。

——…今、私と志岐さんは……所長と秘書、という肩書きの枠を外

れたところで、……体だけの関係にある。

もちろん望んだのは他でもない、私だった。



腕時計が差すのは十九時……少し回ったところ。

「ふー……」

志岐さんと夜待ち合わせる前は毎回、心の中でほんとうの自分が塀から顔だけを出して、心配そうにこちらを見つめている。

大丈夫、大丈夫。

私、『遊び慣れてる女』まだやれてる。大丈夫だよ。

志岐会計事務所に就職してからの五年間で、外見に対する価値観がま
ず変わった。というか、変えなければならなかった。

美容部員の友人にメイクを一から学び直し、学べるところはすべて吸
収した。

勧められた有料制パウダールームの会員になり、いつお呼び出しがか
かってもいいように体制を整えた。

お給料は充分いただいてるけれど、ジムに通うお金はもったいないと思ってしまうほうなので、もっぱら家トレ。

大学時代から死んでいた食生活を改善させた。

おかげさまで体重は一番多い時よりも八キロほど落ちたままを、なんとか維持している。

そこまでしてやっと、見目麗しい志岐さんと待ち合わせても、引けを取らないくらいなの、いや、ギリギリかな……、と思う。

何にも特記することのない、冴えない平凡な自分。

それがまさかこんな大掛かりな枷を人生に自ら施すなんて、本当にどうかしていると思う。

「——お待たせ、遅くなった」

眦を下げて微笑む彼に『ドキドキしながら待っていた』雰囲気なんて、いっさい出さない。

からりと全力で笑って歓迎し、軽々しく腕をからませた。

「お疲れさまです！ 志岐さん」

「……ああ、夜風がすっかり秋だね。寒くなかった？」

彼が夜空を見上げると、どこに思いを馳せているのかが気になってしまふ、あさましい自分。

体を労う言葉ひとつでときめいてしまふ、この胸の痛みを消せる薬があるのなら、言い値で買うのに。

「ふふ、ぜんぜん！ ご心配ありがとうございます。大丈夫です。それより……早く二人になれるところ、行きましょう？」

「早いな。まだ会って五分も経っていないのに？」

仕方なさそうに笑う時も、彼の顔には……常に翳りがある。

——そう。これは……。

「だって、最高なんですよ。志岐さんが素敵なのが悪い」

「……ははっ。こんな若いお嬢さんから褒めの言葉をいただけるなんて、光栄だな」

言って寂しそうに笑う……そう、これは、最愛の希望をなくしたこの人の笑顔を、ただただ取り戻さんとするためだけの話だ。

……ああどうか彼が、ついでにあわよくば抱かれてみたいと汚い欲を出してしまった私の後ろめたさに、これからどうか、気づきませんように。



シャワーを……浴びるはずだった。

ホテルの部屋に入っすぐ、「平気だと言っても、待ち合わせの間に、やはり冷えているかもしれないから。きみから先に」と気を使われたはずだったのだ。

それなのに浴室の前で服を脱いでいたら、脱衣所の入口の壁に腕を組んで寄りかかっている彼に、じつくりと眺められた。

視線の色気と、余裕のある微笑みが混ざった甘さ。

恥ずかしくてどうしたらいいか内心分からず、でも遊び人を演じる上でモジモジも出来ず、「ふふ、なんですか？　もうシたくなりました？」と余裕なふりをして笑顔を向ける。

穏やかさを湛えたまま、黙って脱衣所に入ってきた志岐さんに、
「…………えっ」

軽々しく抱き上げられ、すぐに洗面台の傍に下ろされる。

臀部に大理石の冷たさが直接伝わり思わず跳ね、彼に抱きついた。

「ひゃ！ ……ん、んんう♡」

その瞬間に、キスが降りてくる。

ネクタイをゆるめながら、ただ黙ってぼんやりと唇をやわらかく重ねてくる志岐さんと、絡み合いながら微かに目が合った。

彼の上質なシャツのボタンに手をかけて、舌を深く、強く絡める。
いつもの香りと混じったジム帰りの汗の香りが、鼻先を掠めた。

堪らなくなつて、じわあつ……と下半身が熱くなつていく。

この『設定』であれば、多少大胆になれる。

本当はいっぱいいっぱいで、この関係が始まってもう何年も経つのに、一回一回ドキドキする。

あまりにも格好よくて、今にも“好きで好きで堪らないです”って口からまろび出てしまいうそで死にそうだ。

けれどそういうことをしつかりと味わうのは、家に帰って思い出す時だけで決めている。

あたたかい舌同士が、やさしく口の中でとろけて絡んでいく。
にゅくっ……♡　ちゅくっ……♡　舌を吸われるのが気持ちいい。

「ふ、う……♡　んう……♡」

頭の奥から痺れてしまいうそなキスの合間に、やっとの思いで彼のシャツのボタンを外しきった。

「志岐さ……も、脱いで……、おねがい……」

ふう……と息を逃し薄く笑んだ志岐さんが身を捻り、シャツが大きな背中を滑る。

彼は脱いだばかりのそれで、ばさっ！ と私の裸体を包み込んだ。
心臓がどきんと跳ねて、ぎゅっと軋む。

「……体が冷たいな……。ちよつとこれで。少しはいいかな」

「あ……あ、ありがとうございます」

身頃を摘みながらそう伝えると、彼は「待ってて」とだけ言って浴室に入っていく、パネルを操作しだした。

その間、シャツがふくんだ彼の温かさと匂いを、密かに味わう。

——お湯はりを、開始します。と機械的な声が浴室に反響し、自動的に温水がバシャバシャと放出しだした音が響いてきた。

「——よし、これでいいな」

インナーを煩わしそうに脱ぎながら戻ってきた志岐さんに、かなり不安になりながら尋ねる。

いや、堂々としていなきや務まらないのだけど。

とはいえ、借りたシャツが汚れてしまうのが……。

どうしてもそれが気になってしまい、落ち着かない。

「あ、あのやっぱりのシャツ……汚れませんか、大丈夫かな……」

彼は僅かに笑みを湛えて、すぐに私の羽織るシャツの中に手を滑り込ませた。

「大丈夫。……いい眺めだよ」

大きな手でふわっとやさしく掬い上げるように乳房を包み込み、むにゅりと形を変える。

彼の手はお湯を触って拭ったばかりだからなのか、じんわりと温かく、しっとりしていた。

「ああ、……つく……♡」

「あー……、こそも冷たいね？ 大変だ」
耳元で、内緒話をするように囁かれる。

ぷにゅ……♡ とやさしく押し込まれた親指の中で、どんどん硬くなっていく乳首の刺激が心地よくて喘いだ。

「あう……♡ はぁ♡ うん……たいへん。つめたい、あつためて」
本当は恥ずかしい。

大好きな人に乳首をこねこねされて、すごく恥ずかしくて俯いてしまいたい。

それなのに同時に、ねだる事そのものに興奮もする。

あさましくて、恥ずかしい。

「相変わらず……おねだりが上手だ」

ふ……と微笑んで身を屈め、先端がねろりと舌に絡め取られる。口の中に含まれてしまった乳首が、ゆっくりそっと転がされた。

「ん、はううつ……♡」

そのなんともいえない、滑らかな温さと心地よさ。

思わずビクンッ！ と全身が跳ねた。

胸の心地よさに感じ入っていると、彼の指先が太腿の内側を辿っていく感覚が追いかけてくる。

はっとして、少しくすぐったくて、ひくんつと足先が反応した。

「あ、……♡ あっ……！」

シャワーを浴びようとしていたのだから、ぜんぶ丸裸。

ショーツなんて身につけていない。

五年かけて丁寧になだけにしつけられた膣は従順に、けれど今か今かとその指がたどり着くのを待っていた。

ぷちゅ……♡ くちゅ、……♡ 浅瀬を撫ぜるそんな恥ずかしい音が、ふたりの間で聞こえてくる。

恥丘から割れ目をいたずらにそつと辿る中指が、とろとろと愛液を絡めながら下へと這っていった。

「は……♡ は、あつ……♡ づ……うう……♡」

「……すごい濡れ方だ。……他とは最近していなかったのか？」

——…志岐さん…、本当は私、あのね…。

家族以外の体温は、志岐さんしか、いまだに知りません。

…自分にとってこれ以上の幸せは、ないんです。

「……最近、…ッ、全然…誰とも…。あぁっ♡ だから今日も…、いっぱい、してください♡」

目を合わせて、へへ…、と笑って、そう伝える。

すると何を思ったのか、舐めしゃぶった乳房から顔を離し、彼は体を起こしてそっとシャツごとぎゅむ、と抱き締めてきた。

——え…。

「…いいことだ。女の子なんだから、体は大切にしなさい。あまり無理をさせてはダメだよ」

こんな時は不思議と、志岐さんは遠い親戚の叔父みたいでもある。

ふふ、とごまかして笑って、「はぁーい」と間延びした返事をするのでいっぱいだった。

「……とはいえ、きみにこんなことを強いてる俺が言えた話じゃないか」

仕事の時は、総じて『私』な志岐さんが、一人きりでいる時だけ『俺』になる。

そういうのも嬉しくて、同時に苦しい。

泣き出してしまいそうなくらい胸を絞るぬくもりは、いつか必ず手放さなければならないと、秒ごとに言い聞かせた。

必死にそれを頭から何度もかき消して、涙になる前に堰き止める。

志岐さんはこんなに優しいのに、……ずっと傷ついたままだから。

どう足掻いてもこの先、彼の『最愛』には代われない。

——そつと様子を窺うような優しい指先がいつのまにかばらばらと増えて、撫で回して、時々ちゅぷう……♡と蜜口に埋め込まれた。

「ああっ♡」

ぬるうゝゝゝ……♡ と半端に出てきた愛おしい指先は、洗面台の煌々とした照明をいやらしく反射している。

「……ああ……、どんどん溢れるな……。ここは……充分あったかいね。もう触らなくても、……いいかな。他のところをあたたためてあげようか。ん？」

そう言って微笑んで、指をより手前に引いた彼の、意地悪な腕を引き留めて、

「やつ、……や……♡ まって」

首を横に振ってみせた。

「やめ、やめないで……！」

「……ん？ もっと？ ……して欲しい？」

目の前の彼の胸板に、頭を預けて何度か頷く。

「して……、もっと……。もっと、触って……おねがい」
荒くなる息のまま、彼の色素の薄い乳首に舌を這わせた。

「……っ、ん……、こら」

ちゅう……、ちゅうと音を立てて、硬くなったそこを吸い上げる。
それも、この人に教わった。

小さくて主張のまったくないその乳首を舐めると、ジムに行った日に
香るボディソープの匂いが、ふんわりと口から鼻に抜ける。

それに混ざる彼の肌の匂い。ひだまりのような、あたたかな匂い。
本当に本当に、大好き……、そう思った瞬間。

——ぐちゅり♡ とナカを不意に貫かれた感覚に、目を見開いた。

「おッ！ ……ああ……ああ………ッ♡」

「ん……、ああ、可愛い」

くぷっ……♡ ぬろ………ぐちゅうっ♡

ああ♡ だめ……♡ 大好きな、志岐さんの、ゆび……♡

背中ぜんぶを包むほど大きな手のひらが、もう片方の手でじつくりと
抜き挿しを繰り返される体を、ぐうっと支えてくれている。

でもよく挿さるようにと残酷に縫い止められているようにも感じて、なぜかより興奮した。

「ああっ♡ んっ、ううっ♡ ああ~~~~♡」

ゆっくりと丁寧なのに、奥までぐり……ぐり……っ♡ と探られる、甘すぎるのに暴力的な指の動き。

胸板に寄りかかって、はあっ、はあっ、と浅く息を逃した。

「は、あ、……しきさ、ん♡ だめ……！」

「いいや、だめじゃないはずだ」

頭の上からやさしいテノールでそう諭されれば、甘美な敗北に頭の中が蕩けたような感覚に陥る。

「……好きだろう？」

「うう♡ うう……♡ しゅき……♡ それ、あ……♡ あ……♡」

ぬちゅっ……♡ ぬろ~~~~♡ ぬちゅうっ♡

「は、っあ……♡ ああ~~~~♡」

一定のリズム、緩急のあるゆっくり……ねっとりとした抜き差し。

ぬちゅ……♡ ぬるぅ……♡……ぬちゅっ……♡

何度も何度も敏感な奥をねちねちじつくりと刺激されて、どんどん力が抜けて、蕩けていった。

ああ、……何にも、考えられない……！！

「あ……♡ あ……♡ まっ、はあ♡ んんぅ……ああ♡ きもちい、

あ♡ あッ♡ しきさ、ッ♡ ああうっ♡」

「ああほら、顔上げて。キス」

息も絶え絶えにうずめていた彼の胸から離れて、かぶりを上げた。彼の舌がぴちゃ……♡ とこちらの唇を舐め上げて、はむっ……♡ と口全部を包まれる。

「ん、うっ、う……♡ ん！ んんっ……♡」

ぐぷん……ッ♡ 一速で膣の奥に当たるまで強く貫かれた。

「んぅ!?♡ んんう……ッ……ッ……!!!」

ぷわあっ……と吹き溜まりが弾けて、大きく体が跳ねる。

抗えない痙攣を何度も繰り返し、生理的な涙が滲んだ。

ひくんっ……♡ ひくんっ……♡ 体が大きく震え、だらりと力が入らなくなる。

舐め取られる唇のとりとした愛撫にさらに快楽を注がれて、何度も何度も彼の指を出ていかないと引き込んだ。

唇を離れた彼が、目を合わせて妖艶に微笑む。

「……ああ、はあっ……、イけたね……。毎度指が引きちぎられそう
だ」

はあ……、はあ……、と息だけをして、まだぼんやりする頭で彼を見つめていると、「はあ、堪らないな……」と小さく彼は言っ、また口づけられる。

「んん♡ ……んう……♡」

——お風呂が、沸きました。

電子的なそのアナウンスでばちん、と空気が変わって、ふたり同時に微笑みただけだ。

まだ会って一時間くらいなのに、もう夜が終わらないで欲しい。

「……洗ってあげる。入りながら……、続きをしてもいい？」

「はい」と答えるのが精一杯の私の頬を一度だけ撫で、浴室へと視線を移した彼の横顔には、泣きボクロがある。それもすき。

なぜ……こんな素敵な人とこんなにかがわしいことが出来ているんだろう、と時々考えた。

この関係が始まって、五年とちよつと。

今あの時と同じことをやれと言われても、そんな迸る勢いはもう持ち合わせていないから無理だな、と最近よく感じるようになった。

あのときの勇気のふり絞り方は、本当にどうかしていたと思う。

それほどまでに、彼を放っておくことが……あの時は、できなかったのだ。

2. 魔法の呪文、『シキセイイチロウ』

関係が始まった五年前……、よりも何年も前。

志岐さんは覚えていないと思うけれど、私は当時高校三年生だった。

——あの頃、学校から三駅離れた予備校に通っていた。

二十二時半。まだまだ電車の中はごった返している。

帰りの路線は選択肢が一本しかなく、これを逃すと親に迎えを頼まなければならぬ。

待ち時間も危ないので、逃すと面倒だとかかなり怒られるのだ。

くたくたの頭と体で、急いでそれに乗らなければならなかった。

……そして毎度始まる、吐き気をもよおす……背後からの。

始めはスカートの上から。そして、だんだんと太腿を撫でられる。

……嫌だし、本当は気持ち悪い。怖くて指先が冷える。

けれど、騒ぐ気力もなく、乗り口を毎回変える頭すら働かない。そのくらい、毎日必死に勉強していた。なにもかもが苦しかった。

そんな何度目かの、おそらく同一人物からの執拗な痴漢行為を、あと三駅、あと二駅……と数えて目を瞑り耐えていた時。

「——いい加減にしたらどうです」

ぴしやりと低い声が背後で響いた。

太腿を這う手が、ピタッと止まってスッと引っ込んだ。……のではなく、ぐにやりと捻り掴まれたらしい。

「ぐっ……、なっ、いでえっ！ はっ!? やめ、やめろ!!」

「やめるのはアナタのほうです」

おそろおそろ振り向くと、背の高いすらっとしたスーツの男性が、小柄で小肥りな中年男性の手首を掴んでいた。

「……先週も、先々週も。彼女に手を出していましたね」

「ひっ……、し、知らねえよ！ 言いがかりだ、何するんだよ！」

背の高い男性は、男を無視して「怖かったですね、もう大丈夫です」と穏やかに視線を合わせて、そう言った。

その瞬間、疲れていた全身からこぼれ出すように、ぶわあつと涙が溢れた。「すみません」「ありがとうございます」「このひと、ちかんです」「蚊の鳴くような声しか出ず、小さくそんなことを言ったと、記憶している。

ちょうど次の駅に停車した時に、男は一度逃げ出そうと手を振り払おうとして、助けてくれた男性と軽く揉み合いになった。

その時、その人のほうのカバンから、何かが落ちたのが見えた。

——あつ。パスケース……！

気を取られているうちに、痴漢男のほうが勝てなかったみたいで、電車から降りて連行されていた。

急いで落ちたパスケースを拾い上げて、閉まるドアをこじ開ける。

駅の事務所のような場所で、気まずい時間が流れた。

痴漢男がさらに奥に連れていかれる。捕まるのかな、あの人。

それと同時に、助けてくれた背の高い男性も立ち上がったのでつられて立ち上がり、姿勢を整えた。

「……あ、あの……た、助けてくれて、ありがとうございます……」

「遅くなって、申し訳ありませんでした」

「……え、……？」

まごついた礼を遮り、その男性は真っ直ぐに視線を合わせてきた。

「何度か同じ場面を目撃していたのですが……様子を見えました。あなたが抵抗していないな、とも思っていた。今はマッチングまでして好んでやる人たちもいるらしいですから、確信が持てず……。あなたが青ざめるまでこちらから手を出せませんでした」

何を言っているのか、急なことで頭が回らない。

けれどそれを聞いて、自分の考えが及ばない領域の恐ろしい性被害を受けてしまう可能性があるということだけは、わかった。

「……災難でしたね。怖かったでしょう」

本能みたいなものだ。ちゃんと自分でも意識して自分を守らなければならない、そんなことを思った記憶がある。

それを見ず知らずの高校生に教えてくれる、親切な大人がいること。ぼろぼろっ……と思わず安堵の涙がこぼれてしまった。

「……どうぞ」

彼はいっさいの躊躇なく、綺麗にたたまれたハンカチを差し出してくれた。

ああ、……すごく、優しくていい人だ。

ぺこつと頭を下げて、目にあてる。

ハンカチは大人の男の人のいい匂いがして、余計に安堵した。

「……まあ、普段から……余計なお世話だろうが、電車に乗るときだけでも、ほんの少し制服を下げて足を隠したほうがいい。露出が少なくなるから……いくらかは良いはずだ。ああ、人の……服装に口を出すのはナンセンスか。だが傷つかないために、自分を守るために。ポリシーを曲げることは、けっしてダサイことではないからね」

敬語を崩し、ためらいながらそう言った彼は、真面目な表情。

とんでもなくイケメンだった。

もう絶対に、スカートは必要以上に短くしないと心に決める。

「女の子だから……本当に大切な時のために、ちゃんと守って、大事にするべきだ。……っと、こういうのも今はセクハラになる？　しかし……大事だよね？」

言うとは、——お茶目につこりと優しく笑ったのだ。

その曇りのない、幸せを形にしたみたいな優しい笑顔に、ずぱっと胸を貫かれた衝撃は忘れられない。

まるで春と夏と秋と冬がいつぺんに訪れて、洗いざらい搔つ攫われたかのような、言葉にできない世界のすべてを感じた。

身動きが取れず固まってしまい、気がついた時には、彼はもう次の電車に乗ってしまったあとだった。

そしてあつという間に親がすっ飛んで来て、聴取は受けただけでなきを得た。

ていうかスーツ着てた。大人の男の人って、何歳かわかんない。

まだドキドキが止まらない。笑顔まーじでやばかった。

なんの仕事をしてる人？ いつもあの電車にいるの？

高校生と大人はきつと犯罪だから、絶対興味は持たれない。

でも、でも……！

でも、すっつ……ごい、私……、あの人がいい。

どうしよう。せめて名前が知りたい。

ハッとして、傍にあつた聴取のバインダーをチラッと盗み見た。

名前の部分は半分以上、上の書類で隠れている。

『一郎』という文字だけが見えた。

彼の職業のところに、『会計士』とある。

——…一郎さん、会計士!!!

……はん？ 会計士……ってなに？

両親が泣きながら、帰りの車の中で『送り迎えはやっぱりしよう』と
か言っている。

やだよ。電車乗らないと一郎さんに会えないじゃん。過保護だな。

ぼんやり上の空で、一郎さんのことばかり考えた。

そして、お風呂に入っても考えて。

そうだ。会計士って、何なのか調べないと。

どうしたら知り合いになれるのかも、考えないと。

そして一時間の勉強をしようと鞆を開けて、ようやくと。

彼が落としたパスケースを、返し忘れていたことを思い出した!!

「……シキセイイチロウ……さん……」

彼は一朗さんではなく、せいいちろうさん。まるで魔法の呪文。

「……ええ……？ 名前まで、かつこいい……」

——これが私と志岐さんとの、ファーストコンタクトだった。



過保護な両親が送迎をするようになってしまって、それきり彼には会えなくなった。

返す機会を失ったそのパスケースとハンカチは、いつか会えるかもしれないからと、どこに行くときも持ち歩いた。

傷付けてはいけないと、専用のポーチを用意したくらいだ。

それから会計士が何かを知り、事務関連の勉強をするようになった。ずっと、二度目の再会はなかったけれど。

結局何年も折に触れ、勝手にこの恩人に思いを馳せられる二つのアイテムを、自分のお守りにしていたように思う。

そしてある日。

「——志岐……会計……事務所……!?」え、え……、え……!?」

……求人サイトに載ったその文言をなぞり、そりゃあ調べた。

公式ホームページは、お堅めのデザインだった。

“公認会計士・税理士 志岐世一朗”

会計業務。法人、個人の確定申告。経営コンサル、会社設立、独立企業のサポート。なんでもご相談ください。

「み、……見つけた……!!」

そんな勢いで、当時の仕事を辞める決意もしないまま、志岐会計事務所を叩いたのは恥ずかしいけど、いい思い出だ。

「ぜひ……一緒に働いていただけると、助かります」

面接の時の志岐さんは、瞼が落ち窪んで、見るからに疲れていた。その顔を見た瞬間、『以前助けていただいた者です。あの時はありがとうございました。』だなんて、用意していた言葉は今じゃない気がして、何ひとつ言えなくなってしまった。

そのくらい、他を寄せ付けない翳りが……滲んでいたのだ。ただ忙しくて疲れているだけかな。最初はそう思った。

——けれど、その理由はすぐに知ることとなった。

「ああ、よかった！ 本当に忙しいのよ。よろしくねえ、ヒロセですー」

事務のリーダー格、ヒロセさんは当時からベテランだった。

「新しい秘書さんも出来る人が欲しいって。所長のスケジュールを管理してくれる人が要るのよお。四男坊が生まれる前まで奥さんがきて、時々やってくれてたんだけどねえ」

寂しそうなヒロセさんの顔をガン見して、思わず目を見開く。

……なんと。そうか、既婚……。そうだよね……。

何でその可能性を考えなかったんだろうか、私のバカ。

「へえ……。！ 所長、たくさんお子さんいらっしやるんですね！」

……笑顔を作りながら、彼を諦める。同時に、入社したからには、もう頑張らないとどうしようもない。そんなことを思った。

「そうなのよ。けど奥さんが持病で亡くなってもう二年経つかな……。辛そうでねえ。まあどうしても人手が足りなくなつて。みんなでがんばりましょつて。だから資格持ちの人が入つて助かったわあ！」

——……。思わず言葉を……。失った。

「……。そう、なんですか……。それはお辛い……。大変でしたね……。」

「クライアントさんが増えすぎないようにしてしてたんだけど、そうも言つてられないしね。長男の巡くんが高校生になってからは、いくらもいいみたいで。所長も今お仕事増やしてらして」

……。これまで思つてきたことは、ほとんどが吹っ飛んだ。

やっと知り合えたんだ。今役に立たなくて、いつ恩返しするの？

「……ヒロセさん！ わ、私！ 頑張ります！ 何でも言ってください

い！ あの……なにもかも！ 出来るだけ、教えてください！」

「いいねえ！ 若い子にしちゃ珍しい！ いいよお、鍛えちやるかな〜。ウフフフ、ところであなた関数得意？」

「あつ、とつ、得意になります！」

「ウフフフフ！」



それからあつというまに半年が過ぎた。

入ってからはず、業務で長年事務を務めている先輩方に勝てるはずがないという事は悟ったので、視点を変えた。

志岐さんが詰め込みやすいスケジュールを根回しして調整し、お子さんと過ごせる時間を少しでも捻出できるようにとか。

休憩室で、ちよつといい貰い物の甘味を持ち寄る文化があるのだけど、それをたまに摘みに来る時、志岐さんは目の色を少しだけ変えていることに気づいてしまい。

……あのビジュアルで甘党とか……ッ!! ありがとうございます
す……ッ!!

それで、休日に甘いものの巡りをして、差し入れしたり。

他の人にはないポジションを、自分で見つけていくのがいつのまにか楽しかったというのもある。

もちろん事務の仕事も死ぬ気で覚えたあとに、事務所内満場一致で彼の秘書と呼べるようなポジションにつくことができた。

努力賞!! 気遣いの鬼!! ヒロセさんたちにそう褒められて何とか気に入られた。これは想定外だったけれど、ありがたかった。

それに何より、職場で仕事を見つけるのが楽しすぎた。

内輪事情を知ってから志岐さんに対して、尊敬と憧れはあれど、よりよく見せてあわよくばとか、緊張するとか、そんな欲が一切消え失せた。これが好きな人を推しに変えるライフハックである。

よし！ これで小間使いとしても、恩返しができればそれでいい!! なかなかいいポジションにつけたのでは!?

それで時が来たら、あの時のお礼を、伝えよう……!!

……なんてたかを括っていたのは、さまざまな偶然と勢いが重なり、初めて志岐さんに抱かれたその日までだった。

——その日というのは、少し遅くなった私の歓迎会。

もう入って半年も過ぎたし遠慮しようとしたのだけど、たまたま誕生日と重なっていることをヒロセさんに知られてしまい、急遽皆さんの氣遣いで敢行されることとなった。

雇用主含めて、いい人しかないのだ、志岐会計事務所。

志岐さんのことは抜きにしても、就職できて本当によかった。

ヒロセさんと志岐さんで企画してくれたその会で、二次会のバーがメインとまで言っていたのに、事務員メンバーは「旦那が心配してるから」「息子が迎えに来てるから」「志岐さんのこと、よろしくね」とバーに着くなり次々とあつというまに帰ってしまい、たまたま志岐さんと二人きりに。

……いや超ラッキー!! とはならなかった。

なぜなら志岐さん、……。

「——あー……、今、なんじ、だろうか」

「うんと、十一時四十七分です。……あの、志岐さん……やっぱりタクシー、呼びますか？　だ、大丈夫ですか？」

「あー……、あと？　えー……十三分。十三分は一緒にいよう。うん。一杯奢らせて」

「ええ……？　大丈夫ですか……？　お水、頼みますね」

「いや、いいんだ。いい。大丈夫、大丈夫だから」

——…そう。意外にも彼は、かなりお酒に弱かったのだ。

一件目の時から、顔が赤いから不安だったけど……。

きっとみんなこれを知っていたから、さっさと私に押し付けたな!?

「きみさ……、強いんだね、お酒」

「あーなんか、体質的に、酔えないのが悩みです。可愛げなしです」

そう。『酔っちゃった♡』みたいなことがしてみたい人生だった。記

憶をなくしてみたい人生だった。

渡したお水をきゅ——つと喉に流し込むと、志岐さんは「あー……」

と言いなからスツールにもたれて目を閉じた。

「きみは可愛いよ、問題ない。ふー……、そうかあ……それに比べて私

は、情けない。はは……、息子達には見せられないなあ……」

酔っ払った彼の……何気ない、言葉だった。『きみは可愛いよ』。

不意打ちにもほどがある。可愛げがないと言ったのは自分だ。

彼は流れで応酬をしただけで、でも、……どうしよう。嬉しい。

そして目に映る今のすべてが、いつもは見ることでできない彼の姿だった。

毎日ピシッとスーツを着こなして、忙しそうに飛び回る志岐さんしか知らない。

完璧だと思っていた仮面が、剥がれている気がして……。

そのすべてが危うくて、もっと剥がしてみたくなる、不思議。

「息子さん達、そんなに厳しいですか？　いつも完璧なお父さんなんですから、たまには違うところ見せても、バチは当たらないですよ」

『可愛いよ』に対しては不意打ち過ぎて、反応できなかった。

彼はふつと微笑むと、おもむろにスマホを操作して、コチラに向けた。

「……これ、先週。一番下の。サッカーの試合」

少しぶれているけれど、志岐さんに似た少年が芝生の上で一生懸命ボールに食らいついている動画が流れ始める。

「ああ！ 見たかったんです！ わ……！ 煌世^{こうせい}くん、すごい！」

スマホを受け取りながら尋ねると、こくこく、と酔った彼が頷く。この半年で、息子さん達のことに関しても、かなり詳しくなった。「万年補欠を抜け出してね。六年生になって今回、やっと初出場」

「すごいです、がんばったんですねえ！」

嬉しそうに解説されてすぐ、動画が終わる。

志岐さんがカチ、とサイドボタンを押したその一瞬。

待受に黒髪の、とんでもなく美しい女性の姿が見えた。

「えっ……!? 待って、志岐さん！ 待ち受け、奥様ですか!?」

「ああ……はは、うん。見る？」

困り眉で笑った彼は、照れくさそうな……いい顔をしている。

「見ます見ます！　い、いいですか!？」

微笑んだ彼が頷いた。

そして、見せてくれた画像は、病院のベッドの上。

お見舞いのお花なんだろう。それに寄り添う、青白い笑顔の女性。

隣には、彼女を肩に抱いて笑っている……志岐さんがいる。

「……素敵な写真ですね……！　先輩方からも聞いてましたけど、奥

様、本当にお綺麗な方ですね!」

「これはね……亡くなる、二ヶ月くらい前かな。結婚記念日で」

懐かしそうに目を細めて、彼は画面を見ている。

「……まあ、こういうのも……予防線張ってるっていうのかな。いろん

な話をされるんだよ。その、再婚しないか、だとか。子供のためには、

そうした方がいいんじゃないか……とかね」

取引先の社長さんや企業役員さんなんかが、ご息女や親戚のお嬢さん

を紹介してくれるらしい。

「〃申し訳ありません〃 って断るの……、いったい何度目なんだろうなあ」

……寂しさを消えてしまいそうな彼の横顔を見るのは、通算何度目なんだろう。

もうここまで来ると、さすがに卑しい気持ちも失せてくる。

ただ……それでもこの人は残酷に、電車の中で救ってくれた日と変わらぬ美しさと朗らかさを内に秘めた、寂しい人として目に映った。

「あの、志岐さん。もし、差し支えなければなんですけど……。奥様、どんな方でした？」

なぜか、自然と笑顔でそんな言葉がまろび出ていた。

彼がどんなふうに人を愛するのか知りたいというのも、ひとえにあつたかもしれない。

傷つきたくなくて、怖くて聞きたくないと思う部分はあれど、彼のことを知りたい気持ちの方が勝ってしまうのだ。

とろん……とした目を向けて彼は、ゆっくりと話し始めた。

いつもの志岐さんに対しては踏み込めないような話題を、今彼が自ら話していることに内心驚く。

無意識に、これまで気を張っていたんだらう。

酔っていないと……話せないのかもしれない。

そう考えたら、ヒロセさん達が新人の私にこの洗礼を受けさせるのは、何はともあれごもつともな気がした。

大学時代に初めて出会った時の衝撃。プロポーズをした時の顔。

息子たちが生まれてきた時の感動。病気がわかってからも明るく振る舞う姿。どんどん弱っていく過程。それがあったから、苦しかったけどお別れをするのに意外と心の準備ができたこと。そして、最期。思いのほか息子たちのほうが、打たれ強かったこと。

「……進み続けなきゃいけなかったんですね。本当にお辛かったですね……」

その時を想像の中だけで労うだけで、目が潤む。

自分なら、きつとつらくてつらくて、耐えられない。

志岐さんが一瞬だけ目を睜り、喉仏が上下したのが見えた。

何度も相槌を打ちながら、彼の歩んできた人生に思いを馳せる。

同時に、仕事に就いてすぐにインターネットで調べたことも、頭をよぎっていた。

Wow!! 知恵袋 ベストアンサー

『配偶者に先立たれた者です。はつきり言って、性欲処理くらいしか役に立つことはないんじゃないですかね？ 何年経っても妻以上の人は見づかりません。自分の想いを殺してでも献身に身を尽くすというのであれば、役に立つこととしてみなしてアリだと思います。喪失感とは関係なく性欲があるタイプの人には』

『ですが傷心のときに、長年の片思いをぶつけられることほど迷惑なことってないと思いますよ(笑)。触らぬ寡婦(夫)に祟りなしです』

「……ああ。なんか……私ってバカだな。人生浅いんだな……。
やっぱり、調বেনাকやよかった。」

「とはいえ……。こういうのは時間が解決するんだろう、と冷静に思う
自分もいるんだ。亡くしてすぐに比べたら、かなり癒えてる。心配には
及ばないさ。前を向かねばならないと、分かっているしね」

いつもよりも弱々しく、彼は言った。

作ってもらったお酒のおかわりが、すっかり空になっている。

バッグの中に手を入れた。未だ返せていない彼のパスケースとハンカ
チが入ったポーチを、そつと撫でる。

現実が染み込んでゆく心の奥で、ちっぽけな想いに……蓋をした。

「……あ、そうだ志岐さん。これからは体動かすのとか、いいんじゃないな
いですか。二年ですもんね。忘れるとかじゃなく、少しずつ……考える
事から離れる時間を意図的に取るみたいな。健康的に」

「意図的に……、うんと……体？ 運動とかかな？」

視線だけをこちらに寄越したポワポワした志岐さんに、すごく年上の
人なのに『んガワイ〜！』と撫でくりまわしたい衝動を抑える。

「よくいうじゃないですか。運動って無心になれるって」

「ああ……、確かにね」

「ジムに通うとか」

「じむ……、ああ、ジムね……いいかもしれないな」

「……あとは、気のおける後腐れのない相手との……セックスとか」

「せつくす……ああ。なるほど、セックスか……」

さすが大人。こういう言葉に動揺、しないんだ。

そして酔った色気のある、志岐さんの『セックス』頂きました。

私なんか、好きな人の前でいう言葉じゃないよう！ って頭が沸騰し

そうなのに。……ま、顔には出しませんけどね！

「男性は特にそうなんじゃないですか？ たまには、自分の時間みたいなもの作ったほうが、健康的だと思いますよ」

「……きみ、なんだかさ……、体育会系だよね。意外に」

「ふっふっふ。よく言われます」

嘘です、言われたことはありません。

「ああ！ ていうか、まあ、お好みがあると思うのでもしお嫌じゃなければですけど。してみます？ 私と」

……まあ、えっちしたこと、ないんですけどね。

もう勢いだけだった。平気な顔をして、あっけらかんと問うてみる。彼の口が、あんぐりと開いた。

「……え？」

「私、性欲強い方なんです。どうですかね？ 活きもいいですよ！」

「いやいや魚じゃないんだから。女の子なんだし、そんなに自分を安売りするもんじゃない。こんなオジサンにきみ、……」

「ふっふっふ！ 志岐さんがオジサンなら、『選ばれしイケオジ』ですね！ 気にしないでください、むしろ助かります。カッコいい男の人、だーい好き♡ セックスもイケオジも、だーい好き♡」
「いやいやいや、……」

困惑して少しお酒が抜けたのか、志岐さんはスツールの背もたれから体を起こした。

「……たくさん、いつでも聞かせてください」
「え……」

「お子さんのこと、それに奥さんへの想いも。ゼーんぶ聞きます。それで話し疲れたら、私の性欲処理にも……無心で付き合ってくれませんか？ 運動運動！ ね？ 悪い話じゃないですよね？」
「性欲処理って……」

そう言ってまた水をあおった志岐さんが、「ええ……、きみって……あ、いや最近の若い子って……こういう感じなの？」とタジタジになっている。

それには、あはは！ と声を出して笑った。

だってもう、笑うしかないじゃないか。

いつもはしっかりとしなやかで、力強くて頼りになる大人。

なのに、どこか消えてしまいそうな危ういその憂い。

それを見つけるたびに、どうしようもなく身を焦がすのだ。

一途な人。

ねえどうしてそんなに、どこまでも理想通りの人なの、志岐さん。

私はどこかで……話を聞くことでたぶん、少しでも彼に対してがっか

りしたかったのかもしれない。

けれど、失敗に終わった。

志岐世一朗という魅力の前にひれ伏して、だったら今、彼にあったらいいなと思える存在って何って。

どんなヤツだとよくて、どんな感情をあげればいいのって。

そう思った時には私は頭が悪いから、もうこれしか、思い浮かばなかった。

知恵袋で例のベストアンサーを見たあと、A Vを観ておいた自分、グッジョブ。すんごくアホだけど……。

肘杖つきながら、『ま、絶対ありえないな！あの志岐さんってち出来るとか。最高だな!! 一生叶わぬ夢だわ』とスナック食べながらポヘーと面白半分でそれ(社長と秘書が会議室でするやつ)を観ていた私が、今この状況を見たら、きつと泡を吹いてるな。

昔読んだ漫画に、『理性や論理はあてにならない。本能を信じよう』とあった。『自分の第六感がゴーサインを出すはずだ』『この時がタイミング、今だと思ったら、行動は大胆かつ冷静に!!』

——今が、その時!!

……そのキャラの最終出演回みたいに意気込んで、志岐さんにリードを任せて連れられた名のあるホテルは、もう部屋がいっぱいだった。

結局私たちを受け入れてくれたのは、ひっそりと紛れるように佇んだ俗っぽいラブホテル。

初めてだった。まさに冒険者の宿屋。

あらゆる引き出しやクロークを、全部開けたくなる。

「……わー。……はー……!」

お水のストック、添えられた避妊具のストック……。

テレビのリモコン!! これつけたら『あんあん』って始まるやつ!!
「——あれ。こういった場所は……あまり使わないほう？」

気遣った声色で腕時計を外す志岐さんと、感じる場数の落差。しまった。つい好きな人との初ラブホにはしゃいじゃったよ。ああどうしよう。

処女ってこと、隠し通せるんだろうか……、私。

ボロが出る前に……、とりあえず、いったん体制を整えたい。「ええと、シャワー……浴びてきますね……！」

ゆっくりと歩み寄る志岐さんが、ベッドの傍で立ち止まった。近くに立たれると、いまだにその身長差で圧倒されてしまう。顔を覗き込まれた。

「……あのさ。今更だけど……きみ、本当に本気？」

「えっ。私がシャワーを浴びてる間に帰るとか、しないでくださいね!? ……ていうか、帰りたくなっちゃいました……？」

思わず縋るような声が出てしまい、慌てて軽く笑顔を作った。実際は緊張で吐きそうだし、指先は冷たい。

口の中もカラカラで、同時に高揚もしている。

「いや……帰らないさ。ただ、……いいのかなって。確認」

カフボタンの外れたシャツの袖口からのぞく、腕時計をはずした彼の
手首と、血管が幾重にも浮き出た腕の内側を初めて見た。

それがゆっくりと、頬をかすめる。

ほんのりと、すれ違うたびに感じていた彼特有のやさしい香りも。

心臓がありえないくらい早く脈打っていくのが、わかった。

——あなたの寂しさを拭えるなんて、これっぽっちも思いません。

ただ、これまでのあなたを労ってあたためたいという願いを叶える方
法が、これしか思いつかないんです。

……ああ。神様お願いします。一晩だけで、いいんです。

「確認なんていらないます。私のこと、気楽に好きにしてください」

——……どうかどうか、この夜が恩返しになりますように。

何か望むなんてもつてのほか。

この人の弱みに漬け込んで、私は自分の積年の望みを、歪な形で卑しく叶えようとしている。

いいか悪いか、間違ってるか合ってるか、そんなのわからない。掠めた手のひらに、明確な意思を持って頬を引き上げられる。

一度ためらって、目が合う。こんな近くでは、初めてのことだ。もどかしくて、でもずっと感じてもいたい。

新しい感覚ばかりが溢れる。結局、顔の角度を変えて近づいてきた彼の唇に、なにもかもが搔つ攫われた。

志岐さんのキス……あつたかい……。嬉しい、泣きそう。

感傷に引っ張られぬよう、必死で彼の唾液を飲み込みながら、その首に腕を回した。そつと舌で撫でられる。

生まれて初めての、忘れられない、長い……長い、キスだった。

シャワーの後は、まず指が肌に沈み込む感覚に、慣れなければいけなかった。

あと……たぶん、志岐さんは、ハグが好き。

ベッドの上で互いに糸纏わず、ぎゅうつと背後から抱きしめられながら、その熱い手のひらが全身をすべっていく。

むにゅっ……♡ すりすりっ♡ 胸を揉まれながら、親指で硬くなつた乳首を弄ばれる。

「ん……っ♡ あ♡」

すっかり最初の長いキスでとろとろに心をふやかされてしまつて、頭がぼんやりしていて、力も入らなかった。

慣れているふりをするって、何をしたらいいのか……わからない。

包み込む手のひらは熱くて、乳首をくにくにさせる指先はえっちで、背中にぴたりと当たる体はぽかぽかとあたたかい。

それだけで、ものすごく……気持ちいい。

「……体が少し……冷たい？ 冷え性かな」

「ん、……んうっ……ふ、う♡」

「ふ……、ねえ、聞いてる？ まだ撫でてるだけだよ」

少しだけ笑った背後の志岐さんの問いに、まったく答えられない。

両方のおっぱいを優しく揉まれながら、乳首をこりこり♡ と同時に弄られて……耳のふちを舌先でツ——……♡ と辿られる。

「ああッ……は、うん……うッ♡」

全身が震えた。

聞かれると恥ずかしい、声にならない鳴き声みたいなのが漏れる。

同時に腰のあたりがぞくぞくう……っ♡ と甘やかに戦慄いて、肌が

粟立った。

はあ……、と熱い息が吹きかかる。

これも思考をばらけさせてよくない。

ちゅっ……♡　ちゅくちゅくちゅくッ……♡　耳に直接舌の絡む音が流し込まれる。

目を瞑って逃げたい気持ちを、なんとか抑えないといけなかった。慣れている、ふりを……しすぎるのも、良くないのかな。

……ああ……っ♡　本当、どうしよう、……余裕………ない……ッ♡　後ろに振り向いて彼を見ると、余裕そうな優しい瞳とかち合った。

「ん……？　どう触って欲しい？」

「あ……！」

さっきまで、あんなにふにゃーって酔っ払ってたのに、大人怖い！　そんなことを思っていたらあっという間にむちゅ、と唇を掬い取られるようにキスされて、体に熱を帯びる。

きゅう♡　キスされながら、乳首を両方強めに捻られた。

「ん♡　んんッ!♡♡」

きゅう……♡　ぐりぐりぐり……♡

急な刺激に、息が止まりそうになる。

「は、あうむ……♡ んん♡ んん♡」

強い刺激のあと、急に手のひらで掠める程度にそつと上下された。

あ……、どう、しょ……。鼓動の速さが、手に伝わりませんように……。

それに私も……何か、しないと……だよね。

そつと背後に手を回し、お尻に当たっている硬い部分に、指をゆつくりと這わせる。

それは、自分の体にはどこにもない感触。

人の体のものなのかと、疑いたくなるような。

あ……！ あったかい……！ うわ、かつ、硬い……、こんなに、硬いんだ……。

そうつと、ゆつくりと、押し付けられたその肉棒を、お尻と手のひらで挟み込んで撫でてみる。

「ん、……」

あ、すごい。志岐さんの……ここまで、硬くなるんだ……。よしよしするみたいにと撫でたり、きゅっと握ったり。

不思議と、愛おしさが湧き上がる。

よかった、硬いつてことは、少しだけでも、反応……してくれてるって……、ことだよね……。

ぷは……♡ とキスを離れた志岐さんは、咎めるみたいにこっちを見た。

「ん……、こら、っ」

「え？ あ……ごめんなさい、痛い？」

微かに潤んだ瞳と視線がぶつかり、彼は眉をほんの少し顰めた。

「……いや。……はあ……、きみの手が、あったかい……」

躊躇いがちに志岐さんが漏らした「はあ……ッ」という長くて熱い息が、耳をくすぐる。

それがあまりにもセクシーで……ぐつときてしまった。

もっと、もっと……。もっと、知りたい。この人の色々な顔。

お腹の下がじくじくと熱を持って、熟れていくような。

すりすりと触り合いながら、彼の愛撫も大胆になっていく。

しばらく胸を弄んでいた両手が、するするとお腹を辿って、足の間に

滑り込んでいった。

ああ、まずい、そこ……。自分以外の人で……。触られるの、初めて

だ……。けど、慣れてる、私は、慣れてるって、装わないと。

恥を捨ててゆっくり、足をほんの少し開いてみる。

それに応えるように指先は恥丘をたどり、中指がつつ……。♡ と割れ

目をなぞった。

「……ん、あ……。♡」

ぬる……。ぬる……。と滑らかに指が筋を上下している。

指が動いたたびに、くちくち♡ と水音が響いた。

「……濡れやすいね。どこが好きかな。ナカ？ 外？」

「ひ、あ……ッ♡ あ、そこ……ッ♡」

「……ん、ここ？」

その言葉と同時に、指がカリカリッ♡ とクリトリスを刺激してくる。

びいんつとまるで電流を流されたような刺激が全身に走った。

「ああ……ッ♡ うう♡ しょこ、んう♡」

指先でこしこし♡ と撫でられているだけなのに。

「う、ああ……ッ♡ あう♡ はあ、っ♡」

あ、ぷくって……、指先、動くたびに触られる面積が増えるよう

な……、ああ、なにこれ、なにこれえ……♡

よく演技で声を出す、なんて言うけど。

そんな余裕、ぜんぜんない。いつのまにか媚びるような甘えたな声ばかり出る。恥ずかしいし、顔を見られたくない。

こりこり♡ こりこり♡

指の腹を押し当ててくるくる捏ねられた。

「あ、あ……♡ は、あう♡」

……って……、ちが、私……、志岐さんのこと、気持ちよくしたいのに……。

つい感じ入ってしまったって、触れていた手が止まっていたことに気づいて、あらためて撫でてみる。

「あ……♡ しきさんは？ どこ、なでられるの……すき？」

快感をいなしながら尋ねると、なぜか彼は困ったように微笑んだ。

「私はいいいよ。きみが気持ちよくなって」

「え、あ……触らないほうが良かったですか……？」

ごめんなさい、と小さく付け加えると、彼は息をついて「違う違う」と穏やかに訂正した。

「仕事中のきみしか知らないから新鮮だね。私のほうから、もっと色々してみたくなった」

「あっ♡ ……っふ……うぐう♡」

くちゅくちゅくちゅ……♡ とくすぐるようなクリトリスへの愛撫が戻ってきて、ふたたび体がぴくん♡ と震えて声が出る。

そして耳元で、「……やっぱり私のも触ってて、くれる……？」と囁かれる。

ぞくう……♡ と震えながら背後の怒張に手を這わすと、「ああ……あったかい……」と吐息混じりで返ってくる。

それだけで嬉しくなつて、とぷんと熱くとろとろに泥濘んでいく。愛液の滴る入口にくちゅくちゅくちゅ♡ と指を馴染ませて、彼は何度もクリトリスを繰り返しねちねちと捏ねる。

や、やばい……、うあ……♡ き、気持ちいいよお……っ♡
「も……や、あ♡ あう♡ しきさ……ああっ♡」

ひくんひくんと体が震えて、汗がいっぱい出てくる。
な、なんか、へん。なんか、からだか……やばい、あ、熱い……!!
しっとりとした体を包み込まれて、肩を舐められた。

「……ん、汗かいてるね……」

「うう♡ ……ん、う……♡」

とん♡とん♡とん♡ と指先でタップされるクリトリスが、ぷにと
充血して腫れ上がっているのがわかる。

触れるたびに、頭の中で炭酸が弾けるような感覚が追いかけてきた。

「はあ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あうっ♡ だめ、とんとん、やめ、

あ、あう♡」

「ん、とんとんするの、だめ？ 気持ちよくないかな」

とん♡とん♡とん♡とん♡

ああ……ッ!! とんとん♡ されるたびに、ちよく、せつ……じん、
じんって響くう……♡ それだめ……!! だめ……!!

「はあう♡　ちあ、あ♡　やつ、あ♡　なんか変なの、だめ」

「ああ、だめ？　じゃあすりすりして、くるくるしてあげようか。それなら楽かな」

間髪入れずにぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡　とかき回された。

「ああ♡　ああゝゝゝ……ッ♡」

何、何この今の、獣みたいな声、やだあ……!!　は、恥ずかしすぎる……!!

でも……無理……止めらんない、むり……♡

「これも刺激が強いね……。じゃあ、とんとんに……戻そうか」

とん♡とん♡とん♡とん♡とん♡

「っひ♡　お♡　とんとん、や、あっ！　まっ……ッッッ、う、ん、んうゝゝゝ……ッッッ!?♡♡」

ばちん!!　とブレーカーが落ちた時みたいな、そんな不意打ちだった。初めて与えられた絶頂に、体が打ち震え続けている。

「ふ、う……♡ はあ……♡ はあ……♡」

「……イけた？ ふふ、よかった……」

汗ばむ体をそつと撫でられて、さらにびくりと震える。

全身が性感帯になったみたいに、敏感になっている気がした。

肩越しに軽くキスをしてから体勢を変え、志岐さんが足の間にくる。

手前に腰を引き寄せられて、太腿を思い切り返された。

お尻をぐいぐいと彼の顔の近くまで持ち上げられる。

ぐしやぐしやに濡れそぼった秘部もお尻の穴も、上にいる志岐さんに

丸見えだ。彼の顔がそこに近づく。

「……え……？」

ま、待って、すごい格好してる、これ、やだ……!!

「あ……や、まつ、んっ……んあッ♡♡」

れろおろ……♡ 見せつけるように生ぬるい舌が膣の入口をなぞつ

た。ヒクヒク♡ して、きゅうつ♡ と膣が引つ込む。

待って、ああっ♡ やばい、なに、これえっ……♡

あのいつも紳士な志岐さんが、……!! こんな……、こんないやらしい舐め方、するの……!?♡

ぺろぺろ……♡ ぴちゃぴちゃ……♡ と舐めるたびに、舌と入口がとろとろとした透明な愛液の糸を引いて繋がったまま。

舌がぴったりと襷に触れると、ひどく熱い。

あう♡ すっごく……♡ きもちいい……! えっちだよお……♡
わざとそうしているんじゃないかと思うくらい、ゆっくりな動き。

ぴちゃ……ぴちゃっ……♡ とろろ……っ♡

繰り返し表面を舐め上げては、そっと顔を離す。

そしてソコを静かに見つめたまま、「ヒクついてるね……」と囁いて、また赤くてらてらした舌を伸ばされる。

志岐さんの目は、穏やかなままなのに煌々としていた。

……なんだか、完全にスイッチが入ってしまった、みたいな。

ぬちゅうう♡ 今度は深くキスをする時みたいに角度を変えて、深く舌を挿入される。

「ん……う!♡ あぐうつ♡ は……うう、……♡」

志岐さんの頭が上下に緩く動き、そのたびにぬめった熱い舌がぐぼぐぼ♡ と入口を広げていった。

「っひ! ん……、ふぐうつ♡♡」

なあ、に、これえ……♡ ああ、ナカ、ナカに熱いの、ああ♡

ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡ぬぽっ♡ と膣への抜き挿しを何度も繰り返される。

「あ……ッ♡ あう♡ は、あう♡ しきさ、あ♡」

視線だけを穏やかに、こちらに寄越された。「ん?」と言いながらも、彼は執拗に責めることをやめようとはしない。

「……ああ、これもね……」

太腿を抱えている腕が伸びてきて、陰核を親指でやさしくくちゅくちゅくちゅ♡と混ぜられた。

「ううああ♡ や、あ♡ ちが、ちがう、あ♡」

じゅるっ……ぬぽ……っ♡♡ くちゅくちゅくちゅ♡♡

「あ、や、あっ、そんなにシちゃ、あ……♡ ああ……♡……♡」
くちゅくちゅくちゅ♡♡ と指でクリを撫で回されて、ぬぽぬぽ♡♡ と抜き差しされる舌はぜんぜん止まってくれない。

あ……!! またくる……♡ さっきのお……♡

「あああ♡♡ むり、い、あ、あ♡ あだめ、あ、

あう……♡♡ ツ♡♡」

腰が、膣が。何度も何度も痙攣している。恥ずかしい。

口の端から垂れる涎を拭いとる力が、もう残っていない。

「あう……♡♡ ああうっ……♡♡ んんうッ……♡♡」

びくんっ♡ びくんっ♡ と体が痙攣に沿って跳ねるたびに、わけのわからない声が漏れて、目の前がチカチカした。

「……ん、またイったね……気持ちよかった？ ふ、可愛いな……。おいで」

生理的な涙も、涎も。きつと顔はぐしゃぐしゃだ。

せっかく……メイクも綺麗にして、シャワーの時だって気をつけて浴びたのに……。

かわいいって……、しきさん、へんだよ……。

「あ……はっ……はう♡ んむう♡」

覆い被さってきた志岐さんが、おかまいなしにキスをくれる。

「ごえん……なしゃ、わたしば、っかり……きもちい、ん、はうむ……♡」

言っている途中で、またキスをされる。ちゅくつと舌を吸われて、だらしなく力が抜けていく。

うう……♡ ぜんぶ……ぜんぶ、きもちいいよ……♡
ぼんやりとキスに応えながら見上げると、彼は穏やかに小さく「……
ごめん」と言って、両腕ですっぽりと私を包み込んだ。

——え、だき、……しめ、られてる……？

「ああ、少し体が冷たい。汗で冷えたかな。……気が付かなかった」
噛み締めるようなその声は、私に向けているようにも、宙に浮かぶ何
か別のものに向けているようにも聞こえた。

……よく考えて、何か答えたい。

でも、志岐さんの体がぼかぼかで……きもちよくて、頭がぼー……つ
とする。

いった後って、短距離を走り切ったみたいなの、湯船に浸かった瞬間み
たいな、そんな浮遊感があるんだなあ……。

「ふふ……だいじよぶです。しきさん、やさしい……。そゆ、ところ……」

……大好き……。

互いの体の間に、手を伸ばして這わせた。

さっきからお腹を押している、熱く硬いものを、ずっと掬うように撫でる。

そうしていると、穏やかさの中に熱の混じった視線とぶつかった。

「しきさ……も、いっぱい、きもち……よく、なってほしい……です……。もう、いっぱい……だから、ね、いいでしょ……？」

自分でも、何を言っているのかわからない。

「插れて、しきさん……、插れて……おねがい……」

ふわふわする……。今寝たら絶対気持ちいい、みたいな……。

穏やかに小さく微笑んだ彼が、体を起こして避妊具をつけている間、そんなことを思った。

ふたたび覆い被さり、熱い先端が入口をぬるぬると撫でる。

「あ、う……、んう!?♡」

ぬぷぷ……♡ と挿される感覚、生まれて初めて感じる質量。
その熱さと硬さに、思わずぎゅうっと目を瞑った。

ああ、ちがう、ちがう、力を……、抜かなきゃ……！

「……あ……♡」

おお、き、い……！！ か、たい、挿されて、るっ……♡

ずぶん……♡ と奥を貫かれた。

その後すぐに驚いたような表情をして動きを止めた志岐さんと、視線がぶつかる。

「は……、ちょ、まって、え……きみ」

……え……。な、何か、ダメだった……？

ああ、もしかして……、処女にしかないような、表情、しちゃったのかな……!? 待って待って……。

戸惑いを必死に隠して、頭をフル稼働させて考える。

うう、でも、おつきくて、引き攣れるみたいに、痛い……！！

でもこの痛みは、志岐さんが挿入ってる、証……。志岐さんと、ひとつになってる、あか、し……。

「へへ……」

嬉しい……、嬉しいよう……！

「志岐さ、おっきい……、へへ、い、今までの人で、い、……一番、おっきい」

震えながら、精一杯の、必死な嘘をつく。

「ちよつと、だから……ッ、痛い、かも……？」

彼が一瞬、目を瞠った。

——ああ、お願い。志岐さん、気づかないで。
責任を感じないで。

あなたのこと、あたためただけです。

心保つ、ほんの一瞬の何かであれば、それでいい。

この先もずっと、奥さんが一番で、そんな一途なあなたを少しでもあったためられるなら。

私はどこまでも、演者でいいです。

あのとき助けてくれてありがとう、志岐さん。

辛いときに、思い出せる存在でいてくれて、ありがとう。

いい大人の見本みたいなあなたの、こんなところを見せてもらったの、対等になれたみたいで、本当に嬉しい。大好き。

涙が……堪えられない。情けない。笑顔を作った。

「……でも、大丈夫……へへ、……すっ……ごく、気持ちいいから……」

さらに瞠目して固まったままの彼を、ぎゅうっ……と抱きしめる。

「……だから、おねがい、やめないで……！ おねがい志岐さん、……」

おねがい……!!」

肩のあたりで、彼の喉仏がぐくりと嚙下した感触を拾う。

「……安心して……」

甘いけど、低い声が耳元を静かに掠める。

「……もうやめるとか、俺には無理だ」

掬い上げるように頭を掻き抱かれて、どくん、と胸が高鳴った。
ぺろ……♡ と唇を舐められて、舌を絡め取られる。

——……え、まって、あ……いま、『俺』って……言っ……？

「は……んん、む、んう!?♡♡」

ずちゅ♡♡ ぐぢゅっ♡♡ ずっ……♡♡ ずちゅう……♡♡

あ、あ……!! 志岐さ、腰、あ……うねって……♡♡

慣れない膣壁が、硬くて熱い志岐さんの怒張を滑らせていく。

あ、でも……さっきみたいな、奥には、こない……？

ずっ♡♡ 「ん♡♡」 ずっ♡♡ 「ううん♡♡」 ぬちゅ♡♡ 「は、あむ♡♡」

とちゅ♡♡ 「ひ、んう♡♡」 とちゅ……♡♡ 「うう……♡♡ ツ♡♡」

舌を絡めるキスを受けながら、志岐さんのとちゅとちゅ♡ する浅めのピストンが容赦なく繰り返され、その度に声が漏れる。

まったく抑えられない。

や、やだ……！ 恥ずかしい……！！

「ふう………」

唇を僅かに離して、志岐さんはいなすように一度息を吐いた。

「……ごめん、セックス……なんて、……もう、何年も、して、なかったから……、あまり、……加減、が」

はあっ、はあっ……、と息をつく彼を見つめた。

……ぜんぜん、痛くない……。

……すっごく……、ああ、これ、すき……。気持ちいい……。

……あ、これ……もしかして、合わせようと、してくれてる……？

……い、痛いと言ったから、慣れさせる……ために……？

汗ばんだ志岐さんの涙ぼくろに、堪らず衝動でキスをした。

「しきさ……、気に、しないで……、んう♡ 好きに♡ 好きにしてくださ……ああうっ♡」

たちゅ♡ たちゅ♡ と浅く入口を繰り返して優しく刺激されて、何度も声漏れる。

はあっ……、と息をつき、とろ……とした視線で口づけられた。

「……ん、じゃあ……少し、激しくするよ……、いい？」

肩口で、こくこくと小さく何度も頷いてみせる。

起き上がった志岐さんが、ぬぽ……♡ とペニスを引き抜いた。

「んあう……♡」

その滑りにも、甘えるような声が出てしまう。

楽になったはずなのに、ひどくお腹が寂しかった。